水仙の幻想

薄田泣菫

すべての草木が冬枯れはてた後園の片隅に、水仙が五つ六つ花をつけてゐる。

そのあるものは、肥り肉（ふとじし）の球根がむつちりとした白い肌もあらはに、寒々と乾いた土の上に寝転んだまま、牙彫（げぼ）りの彫物のやうな円みと厚ぼつたさとをもつて、曲りなりに高々と花茎と葉とを持ち上げてゐる。

白みを帯びた緑の、女の指のやうにしなやかに躍つてゐる葉のむらがりと、爪さきで軽く弾（はじ）いたら、冴（さ）え切つた金属性の響でも立てさうな、金と銀との花の盞（さかづき）。

その葉の面（おもて）に、盞の底に、寒さに顫（ふる）へる真冬の日か

げと粉雪のかすかな溜息とが、溜つては消え、溜つては消えしてゐる。

水仙は低く息づいてゐる。金と銀との花の盞から静かにこぼれ落ちる金と銀との花の芬香（ふんかう）は、大気の動きにつれて、音もなくあたりに浸（し）み透（とほ）り、また揺曳する。ぼろぼろに乾いたそこらの土は、土塊（つちくれ）は、その香気のために絶えず焚（た）き籠められ、いぶし浄（きよ）められている。水仙は多くの美しい生命をもつものと同じやうに、荒つぽい、かたくなな土の中から生れいでながら、その母なる土を浄めないではおかないのだ。

すべての香気は、人の心に思慕と幻想とを孕（はら）ませる。

私は水仙の冷え冷えとした高い芬香に、行ひ澄ました若い尼僧の清らかな生涯を感じる。

蠟石(らうせき)のやうにつめたく、滑らかな肌をしたこの後園の尼僧は、生れつき環境の騒々しさを好まないところから、わざとすべての草木は枯れ落ち、太陽の光さへも涙ぐむこの頃の時季を選び、孤寒と静寂との草庵のなかに、独自の生涯を営み始める。ひとりぽつちといふものは、自分の生活をもつてゐる者にとつては、必ずしも悪い境遇ではない。草木の多くは太陽に酔ひ、また碧空(おをぞら)に酔ふが、時季が時季のこととて、今は太陽の盞も水つぽつくなり、大空の藍碧も煤(すす)けきつてゐる。

清浄身（しやうじやうしん）の持主であるこの尼僧は、そんなものには見向きもしないで、その眼はひたすら純白な自らの姿を見つめ、そしてわれとわが清浄心のむせるやうな芬香に酔つゐいる。この清浄心の芬香こそは、持前の大きな球根の髄から盛り上げてくる水仙の生命そのものなのである。

　どうかすると粉雪のちらつかうとする頃だけに、恋の媒介者である小蜂など、気まぐれにもここに訪れてこようとはしない。むかし、孟蜀にすぐれた術士があつた。この男は、画の道にかけてもかなり評判が高かつたので、ある時領主が召し出し、御殿の前庭の東隅

で一つがひの野鵲の画を描かせたことがあつた。すると、どこからともなく色々の小鳥がその近くへ飛んできて、べちやくちやと口喧(くちやかま)しく騒ぎ立てた。それに驚いた領主は、さらにまたその頃花鳥画家として声名の高かつた黄筌(くわうせん)を召し出し、庭の西隅で同じやうに一つがひの野鵲を描かせたが、今度は別に何の不思議も起こらなかつた。領主はその理由を筌に訊ねた。

「おそれながら私の画は藝でございますが、あの男のは術の力でできあがってをりますので……」

かういつて答へた黄筌の面(かほ)には、そんな小供騙(だま)しのから騒ぎなどには頓着しない、真の藝術家にのみ見ら

れる物静かな誇りがかがやいてゐたといふことだが、私は今水仙の純白な花びらに、小蜂の騒音などを少しも悦ばない、高い超越と潔癖とを見ることができる。

それだからといふではないが、水仙の子房は一粒の実をも結ばない。ちやうど尼僧が子を孕(はら)まないのと同じやうに……

底本：「泣菫随筆」冨山房百科文庫、冨山房
1993（平成5）年4月24日第1刷発行
底本の親本：「樹下石上」創元社
1931（昭和6）年
入力：本山智子
校正：林　幸雄
2001年7月6日公開
2006年1月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。